

「まやかし」

脚本
さいけ

登場人物

☆男版

犬飼 羊

田中龍都

犬飼 健治

土居清光

犬飼 かよ

菅野友絵

犬飼 知子

小島亜梨沙

チハル

吉田理奈

カナ

渡邊千奈津

アキ

山岡よしき

トウミ

青木ちか

哲也

林田雅和

詩帆

多賀葉里

磯輔

大西聖志

ポンコ（法子）

笠原芽吹

館山

佐藤大樹

舞台 部屋

①チハルと羊

暗転中

音、お湯を沸かす音、まだ沸騰はしていない。

明転

チハルと羊の二つの頭は重なっている。チハルは離れる。唇を気にする羊。

羊 「……。」

チハル 「……ごめ、急に。」

羊 「……。」

チハル 「大丈夫？」

羊 「うん。」

チハル 「え？」

羊 「ん？」

チハル 「いや、その。」

羊 「何？」

チハル 「あ、ごめん。」

羊 「……なんで謝るの？」

チハル 「だって。」

羊 「……。」

チハル 「……。」

羊 「謝るような事したの？」

チハル 「羊ちゃんの受け取り方次第では。」

羊 「どう受け取ったと思う？」

チハル 「わかんない。」

羊 「……。」

チハル 「教えて？」

羊 「……。」

チハル 「あくもう失敗したー。」

羊 「そんな落ち込むなって。」

チハル 「……我慢できなかつた。」

羊 「そうだね。」

チハル 「・・・」
羊 「もう沸騰してるかもよ。」
チハル 「何考えてる？」
羊 「ん？」
チハル 「今。」
羊 「今？」
チハル 「うん。」

スマホの音、手に取る羊、チハル気にするそぶりを見せる。

羊 「・・・はあ。」
チハル 「どうしたの？」
羊 「幹事。」
チハル 「幹事？哲也君の？」
羊 「うん、飲み会の幹事する事なってるね。」
チハル 「ふうん。」
羊 「あんまやったこと無いからどうしたらいいかわからなくて。」
チハル 「苦手そう。羊ちゃん。」
羊 「でしょ？」
チハル 「うん。」
羊 「簡単に引き受けたのはいいけど、皆にスケジュール聞いても全然返事こないしき、そんな中、飲み屋の予約して且つ時間帯決めなくちやならなくて、あ、後コース料理？飲みホにするかどうかとか予算どうしようとか、なんかそういうの考えてたら、そもそもこういうの俺向いてないじゃんって思っちゃって。」
チハル 「ふうん。いつやるの？」
羊 「まだ決まってない。」
チハル 「私も行きたい。」
羊 「勿論そのつもり。」
チハル 「やった。」
チハル 「今日泊まる？」
羊 「え？」
チハル 「・・・。」
羊 「これからその・・・幹事の打ち合わせが。」
チハル 「うそだあー。」
羊 「ごめん。」
チハル 「ねえ。」

羊 「ん？」
チハル 「私の事どう思ってるの？」
羊 「……。」
チハル 「嫌い？」
羊 「……そんな事ない。」
チハル 「じゃあどう思ってる？」
羊 「……。」
チハル 「私じゃ駄目？」
羊 「そんな事ない、けど。」
チハル 「はあ。」
羊 「ちよつと、そんなに落ち込むなって。」
チハル 「落ち込むよ。期待するじゃん。ウチの家に来るってなったらもうその段階でそういう事じゃん。だから私、羊ちゃん好きって言ってたハンバーグ作って、チーズも好きってわかってたから中に入れて。喜んでもらえるように。」
羊 「凄く美味しかった。」
チハル 「でしょ？」
羊 「うん。」
チハル 「なのにさ、帰るって言うし。」
羊 「本当に明日朝早いのに。」
チハル 「わかってる！我儘なのわかってるって。なら、羊ちゃんがどう思ってるか言
って欲しい。」
羊 「……。」
チハル 「私、振られるとかそういうの考えたくないけど、このまま宙ぶらりんな状態
が続くよりハッキリさせたい。曖昧なのが一番しんどい。」
羊 「……そうだね。」
チハル 「好きなの。」
羊 「ん。」
チハル 「私は羊ちゃんの事が好きなの。他の誰よりも。今自分の中で一番大切にした
い人なの。」
羊 「ん。」
チハル 「もしかしたら今はまだ好きが小さいのかもしれないけど。もっともっと好き
にさせるし好きになって貰える自信あるよ私。」
羊 「……うん。」
チハル 「ねえ羊ちゃんは？」
羊 「俺も、好き。」
チハル 「……。」

羊 「俺もチハルの事、好き。」
チハル 「・・・ホント？」
羊 「ホント。」
チハル 「そっか。」
羊 「うん。」
チハル 「どれ位？」
羊 「なんだよ、それ。量とかわかんない。」
チハル 「ヤバイ、死ぬ程嬉しい。」
羊 「本当？」
チハル 「うん。あ、もう時間？」
羊 「ううん、もうちょっとだけここにいる。」
チハル 「お風呂入れていい？」
羊 「いいよ。」

チハルと羊の頭は再び重なり、それから抱きしめ合う。少しぎこちなく、とても大事そうに。

チハル 「好き。」
羊 「うん。」
チハル 「本当に好き。」
羊 「うん。」
チハル 「うん。」
羊 「俺も。」
チハル 「うん？」
羊 「心から俺も好き。」
チハル 「・・・。」
羊 「・・・。」
チハル 「・・・安心した。」

後ろにはいつの間にかトウミがいる。それに気づく羊。

トウミ 「・・・。」

お湯が沸騰する音。

暗転

②家飲み

羊が電話をかけている。

羊 「あ、カナ？もう皆来てる？そうだよね、先に始めちゃってて。…ごめん、大分遅れた。こんなにかかるとは思わなくて、大変だよもう…。もう少しでそっち着くから、本当にごめん。何か買って来て欲しいものある？大丈夫？じゃあ急いで帰るから。」

羊の家にて、哲也、詩帆、カナ。館山、がいる。

カナ 「もう直ぐ来るみたい。」

詩帆 「羊ちゃん？」

カナ 「うん。」

館山 「仕事？」

カナ 「多分。遅れるとしか。」

館山 「ふん。」

カナ 「先に始めちゃってって。」

館山 「大丈夫なの？」

カナ 「何が。」

館山 「勝手に入っちゃって。」

カナ 「多分。」

館山 「曖昧。いいのかなあ。」

詩帆 「ご家族の迷惑にならない？」

カナ 「今日一日お父さんと妹は出かけてて誰も家にいないから大丈夫って。鍵は鉢植えの下に。」

哲也 「そうなんだ。」

詩帆 「カナちゃん、鍵の場所とか簡単に言っちゃ駄目。」

カナ 「ごめん。あーもう何してんの、あいつ。」

館山 「どっかの女と遊んでんじゃない？」

詩帆 「え？」

カナ 「おい、館山！」

館山 「キヤー。」

カナ 「酷いよ。」

館山 「冗談だよ、冗談。」
哲也 「そんな事するはずないだろ羊に限って。」
詩帆 「そうだよ、ちよっとコップコップ。」
哲也 「わかってる。見えてる。」
詩帆 「っていいながらいつも溢すよね。取る？」
哲也 「いい。」
詩帆 「どれがいいの？」
哲也 「大丈夫だって。」
詩帆 「でも。」
哲也 「こんな時でも練習しとかないと。」
詩帆 「ならいいけど。」

哲也は机の上のお菓子を取ろうとしている。動きはぎこちない。

カナ 「リハビリ？」
詩帆 「うん。」
カナ 「頑張ってるね。」
詩帆 「早く、元通りにするって。」
カナ 「歩けるようになる？」
詩帆 「うん。」
カナ 「そっか。」
館山 「もうちょい！」
詩帆 「大分良くなったんだよ、これでも。てっちゃん凄く頑張ってるから。」
カナ 「そうだよね。」
詩帆 「うん。」
カナ 「もう半年前かあ。」
詩帆 「ん？」
カナ 「交通事故。」
詩帆 「もうそんなに経っちゃった？」
カナ 「そうだよ？」
詩帆 「そっかあ。アツという間だった。」
カナ 「そりゃ、そうだよね。あの日から毎日お見舞いに行って、リハビリも手伝って、その間に仕事もして、通院に切り替わってからも送り迎えも全部してたんでしょ？」
詩帆 「うん。」
カナ 「よくやるよホント。」
詩帆 「そんな事無いよ。カナちゃんだって羊君が、なっちゃったら私と同じ事する

と思うよ。」

カナ 「するかなあ。」

詩帆 「するよ。」

カナ 「そうかなあ。」

詩帆 「カナちゃん、世話焼きだから。」

カナ 「詩帆にだけは言われたくないよ。」

館山 「シッ！」

カナ 「ん？」

館山 「今大事なトコ！」

哲也、お菓子を持ちあげるが握力が弱くすぐ落ちてしまう。

館山 「あー。」

哲也 「はは、指に力全然入んない。半年も経つのにね。」

館山 「もう一回やろう。」

哲也 「今日は、もういいかな。」

館山 「もう一回。」

哲也 「いいって。」

詩帆 「館山さん。」

館山 「次こそは必ず。必ず良くなるよ。」

哲也 「いいってば。」

館山 「でも。」

カナ 「館さん。」

詩帆 「……。」

館山 「あ、いや。ごめんね。詩帆ちゃん、哲也君も。」

哲也 「謝んなくてもいいですよ。詩帆、タテさんはリハビリ手伝ってくれただけな

んだから。そんなにむくれちゃ駄目だ。」

カナ 「大人だねえ哲也は。」

哲也 「詩帆。」

詩帆 「何？」

哲也 「ありがとな。」

詩帆 「うん。」

館山 「……ひゅーひゅー。」

カナ 「馬鹿！」

館山 「イタ！」

カナ 「そんな事してるからモテないんだよ。」

館山 「別にモテたくないもん！」

ポン子入って来る。

カナ 「そうなの？」

館山 「そうだよ。大切な人はいつも、心の中にずっと。だからモテるとか、モテないとかは関係ないんだよ。」

ポン子 「キモーい！」

館山 「ポン子！」

ポン子 「ん？・・・やー。」

詩帆 「どうしたの？」

ポン子 「なんか、いやらしい目で見てくる男がいる。」

館山 「誰がじゃ！」

ポン子 (館山に指を指す)

館山 (館山カナの方を見る)

カナ 「あんたでしょ。私は女。」

館山 「え、僕！？」

ポン子 「来ないでキモーイ！」

館山 「キモクないでしょ！」

ポン子 「キモーイ。」

館山 「キモクない！」

ポン子 「超キモーイ超キモーイ！」

館山 「キモクないよ！。キモクない！」

詩帆 「ちよつと落ち着いて、ポン子ちゃんは何してたの？」

ポン子 「下の台所でお酒とおつまみかっぱらってきた。」

カナ 「え！」

ポン子 「まだまだあるよ。」

カナ 「駄目だつて！」

ポン子 (缶ビールを開ける音)

カナ 「ちよつと！」

ポン子 「やー返して！」

カナ 「私が怒られちゃうの。」

ポン子 「だってこれだけじゃ少ないじゃん。」

詩帆 「それはちよつと。」

哲也 「家主に確認とってからじゃないと。」

館山 「ねえ。」

ポン子 「わかんないって一つや二つ。(お菓子の袋を勝手に開ける。)

カナ 「わかるよ！てか一つ二つじゃないし！」

館山 「ねえ。」

カナ 「何?!」

館山 「僕キモくないよね？」

カナ 「館さんはいつだってキモイ！」

館山 「・・・。」

羊、入ってくる。

羊 「おまたせー！」

ポン子 「おっす！」

カナ 「遅いよ！」

羊 「ゴメンゴメン。」

哲也 「おっす。」

羊 「哲也。大分元気になったな。」

哲也 「まだまだだけどね。」

詩帆 「羊君！」

詩帆 「詩帆ちゃんごめん！。遅くなっちゃった。」

館山 「ううん大丈夫。」

羊 「羊君。」

カナ 「うわ！館さん。お久しぶりです。なんか大丈夫？」

館山 「いいのいいの。」

羊 「今日は飲もう！乾杯しよう！」

詩帆 「あ、うん。」

詩帆 「何飲む？」

羊 「じゃあ、お茶で。」

館山 「あいよ。」

カナ 「えく飲まないの？」

羊 「うん、明日早いし。あ、ありがとうございます。ってかカナ、お前年上に注がせていいの？」

カナ 「え？館山さんだよ。」

羊 「それはそれでしょ？」

カナ 「遅刻してきて偉そうに。」

館山 「いいの！無礼講無礼講。」

館山、羊に飲み物を注ぐ。

哲也 「じゃあ、改めて、羊から。」

羊 「え？俺？」

詩帆 「うん、集めくれたのは羊君でしょ？だから。」

ポン子 「早く早く！」

羊 「ああ、ごめん、えと今日は飲み会に集まって来てくれてありがとう。今日は哲也が大分回復したっていうのと久々に元バイト仲間の面々で飲もうって言うんで企画しました。じゃあ、お疲れ様です。」

全員 「かんぱい。」

羊 「つで？館山さん彼女出来たの？」

館山 「おっふ。」

カナ 「そこから！？」

羊 「やあ、だってそこからでしょ？」

館山 「あく聞いちやう？」

羊 「聞く聞く。」

館山 「今はね〜。。。いないんだよ。」

羊 「何だよそれ。」

館山 「でも、お見合いはしたの。」

カナ 「え？お見合い？」

羊 「おお！？」

カナ 「詳しく。」

館山 「うん、うちのお母さんから、ちょっと久々にご飯でもどう？って連絡が来てね。」

羊 「うんうん。」

館山 「まあ、偶には顔を見るのも悪く無いかなって事で行ったらさ、まず場所が行った事もない位、凄く綺麗な料亭な訳ですよ。で、今日はえらく張り切ってるなあって思ったらお母さんが着物を着てて、俺は「は？」っと思ったんだけどそういう所なのかなみたいな感じで納得していたら、いきなり紙袋渡ってきて「これに着替えなさい」って。礼服だよ礼服。で、無理やり着させられて個室に案内されて。入ったら、いたのお相手が。」

羊 「うわあ。」

館山 「俺、もうびっくりしちゃってさ。」

カナ 「そんな事有るんだ。」

詩帆 「お見合い自体は、最近流行りみたいよ。」

カナ 「そうなの？」

詩帆 「婚活っていうのかな。」

哲也 「で、その後は。」

館山 「いやあ、もう、テンパっちゃってさ、一言も話さずご飯だけ食べて帰っちゃったよ。」

哲也 「勿体ない。」

館山 「勿体ないこと無いよ。」

羊 「何で？」

館山 「それは、その。」

羊 「言えよ。」

館山 「え？」

カナ 「ホラホラ。」

館山 「カナちゃんまで！さっきの目上の人に対する扱いは？ん？」

羊 「え、何それ言ったかなあ？」

カナ 「いや、覚えはないけど。」

館山 「ええ！」

詩帆 「懐かしいね。」

哲也 「ね。上司いじり。」

ポン子 「ウケる。」

館山 「全然懐かしくないよ。だから！すっげえババアだったの。」

笑う、哲也、羊。

哲也 「相変わらずつすね。」

館山 「笑い事じゃないよ。自分と同じ位の年齢だよ。無理無理。」

羊 「なら、いいじゃん。てか同じ位ならいいじゃないですか。」

館山 「駄目だよ。ババアは。」

羊 「ババア。」

哲也 「自分の年齢も否定してますよ。」

館山 「男はいいの。あ、あとバツイチだったの。」

ポン子 「サイテー。なら、いくつならいいの？」

館山 「十代？」

ポン子 「は？」

館山 「我慢して二十代・・・前半かな。」

詩帆 「それはちよつと難しいんじゃないかなあ。」

館山 「わかんないじゃん。愛があれば。」

羊 「愛って、薄汚れた欲望しか見えないっすよ。」

詩帆 「ロリコン。」

カナ 「駄目だよ、そんな事言っちゃ。」

詩帆 「だって。」

ポン子 「ウケる。」

哲也 「これは、当分出来そうにないね。」

館山 「なっ！揃いも揃ってそんな事言う！？あく！いいいいよ、もういい！あくもう言うんじゃないかった。それとね！ポン子、あんただってモテないじゃん！彼氏いるの聞いた事ない！」

ポン子 「はあ？」

羊 「どこいくの？」

館山 「トイレ！」

館山出て行く。

羊 「拗ねちゃった。」

哲也 「言い過ぎたかな？」

ポン子 「無視すればいいじゃん、あんな奴。てか超失礼なんだけど。私モテるよ、超モテる。」

哲也 「そ、そうだね、今度紹介してね。」

ポン子 「うん・・・哲也君」

哲也 「ん？」

ポン子 「男友達のライン教えて。」

哲也 「え。」

ポン子 「スマホ貸して。」

哲也 「駄目だって！」

ポン子、哲也のスマホを奪おうとするが渡そうとしない。

詩帆 「変わらないね。館山さんもポン子ちゃんも。」

羊 「なあ。詩帆？」

詩帆 「ん？」

羊 「哲也、ちよつとは元気出そう？」

詩帆 「うん、てっちゃんね、この連絡来てから凄く楽しみにしてたんだよ。最近ずつとリハビリ。リハビリだったから。ちよつと落ち込んでる時とかもあつたりして。」

羊 「そうだよなあ、そりゃあ今迄出来ていた事が急に出来なくなつたらきつい。」

哲也 「羊。」

羊 「ん、どうした。」

哲也 「・・・ありがとな。」
羊 「おう。」
詩帆 「今日は随分遅かったね。」
羊 「え？うん。」
カナ 「仕事？」
羊 「そう。中々忙しくて。」
カナ 「お疲れ様。」
羊 「うん。どうしたの？」
カナ 「別に。」
詩帆 「あ、そういえば、チハルちゃんは？」
羊 「ん？」
カナ 「・・・。」
羊 「来れないとか言ってた。」
詩帆 「連絡は？」
羊 「したよ。何か忙しいみたい。」
詩帆 「そうなんだ。残念、会えるの楽しみにしてたのに。」
羊 「ね。」
詩帆 「あ、口に何か付いてるよ。」
哲也 「ん。ゴメン。ありがとう。」
羊 「・・・。」
カナ 「何ニヤニヤしてんの。」
羊 「だって。」
哲也 「え？何？」
羊 「理想の男女だなあ。」
カナ 「そうそう。」
詩帆 「そんな事ないよ。大変だよ。」
羊 「そりや、今はね。」
詩帆 「まだ手術も残ってるし。」
哲也 「そうだね。でもそれは、より良くする為の事だし。生きていればさ、色々大変な事もあるよ。でもそれから逃げちゃ駄目なんだよな。」
カナ 「そうだよねえ。ねえ。」
羊 「うん？やんないよ！」
カナ 「え〜。いいじゃん！」
羊 「嫌だ！」
ポン子 「・・・何かムカつく。」

健治、部屋に入ってくる。

羊 「親父？」

健治 「・・・。」

羊 「どうしたん？」

健治 「・・・なにしてんのや？」

羊 「飲み会。」

健治 「・・・。」

羊 「ん？」

健治 「こんな時にか？」

羊 「うん。」

健治 「お前、お前って奴は、本当に。」

羊 「え？」

健治 「こんな時に何のうのうとしとんねん！」

健治、羊を殴り飛ばす。騒然とする皆

羊 「イッタ。」

健治 「不謹慎にも程があるやろが！」

哲也 「ちよっと、お父さん。」

健治 「五月蠅いわ、部外者は黙っとれ。」

哲也 「うわっ。」

詩帆 「てっちゃん！ちよっと！怪我でもしたらどうするんですか！」

カナ 「ちよっと！落ち着いて。」

哲也 「詩帆俺は大丈夫だから。」

健治 「母親が抗癌剤で苦しんでる時に見舞いにも来んとどんなけ親を馬鹿にしたら気が済むんや。」

羊 「・・・。」

健治 「一家全員で支えなあかん時やろ？なのに何でや？なんでそんな薄情なんや。」

羊 「・・・。」

健治 「答えや、羊！」

羊 「この飲み会は凄い大事なんやで親父。」

健治 「あ？」

哲也 「いいよ、こんな時に。」

健治 「お前それ本気で言うのんか。」

羊 「俺にとっては親友が落ち込んでる時に元気づけるのも凄い大事な事なんや。そ

れ位許してえや。」

健治 「バカヤロウ！」

羊につかみ掛かる健治。館山入ってくる。止めに入る。

館山 「お、落ち着いて下さい！」

健治 「一番大切なのは家族やろが！家族以上に大切なもんなんて無いやろ！今の言葉なあ、入院して副作用で苦しんでる母さんに言うてみい。産んだ母親より友達の方が大事って言うてみい。」

館山 「わわ。」

健治 「離せや、このー！」

かよ、入ってる。

かよ 「お父さん！」

健治 「……。」

かよ 「お父さん、もう止めて。お兄ちゃんには私から言っとくから。今度はちゃんと、お母さんの御見舞行かせるから。」

健治 「……。」

かよ 「ね？」

健治 「……皆もう帰ってくれ。帰ってくれって言うとなんや！」

健治、かよと出て行く。

暗転

③家族

部屋には、かよと羊がいる。

かよ 「お父さん落ち着いたみたい。」

羊 「うん。」

かよ 「ずっとお兄ちゃんの事、薄情や薄情やって。凄いい言草。」

羊 「親父にとって、母さんは一番大事な人だったから。」

かよ 「そうだね、大好きだもんね。」

羊 「あの歳になっても一緒に風呂入ったりしてたし。出かける時は必ずキスして出

掛けてだでしょ？」

かよ 「ヤバイよね。」

羊 「なかなか、受け入れられないよ。やっぱり。」

かよ 「うん。」

羊 「それよかゴメンな。」

かよ 「いいよ。」

羊 「入学早々こんなんじゃないよ、学校も集中できてないだろ？」

かよ 「んな事ない。」

羊 「・・・。」

かよ 「・・・慣れるしかないもん。お兄ちゃんの友達は？」

羊 「ん？」

かよ 「怒ったりとかしてた？」

羊 「いや、そんな事なかったよ。普通に帰ったし。ああ、哲也の彼女はちよっと怒ってたかな。」

かよ 「悪い事したなあ。」

羊 「哲也には『有りがたかったけど時期が悪すぎるよ』って言われた。でも、そんなの言われたらさ。いつまで経っても出来ないよね。」

かよ 「まあね。」

羊 「とりあえず、片付けよかな。」

かよ 「うん。」

片付け始める、羊。

かよ 「なんかさあ。」

羊 「ん？」

かよ 「いつまで続くのかな？」

羊 「そりや、落ち着くまでかな。」

かよ 「うわあ、キツイわ、それ。」

羊 「俺達で決めた事だろ？こっちの方が良いって。」

かよ 「ちがうよ、お兄ちゃんが決めたの。」

羊 「・・・。」

かよ 「どうしたらいいのかな。どうしたら良い答え見つかるのかな。」

羊 「・・・とりあえずさ、親父には俺から改めて話すよ。大分思い詰めてるみたいだから場合によっちゃ病院行った方がいいかもな。」

かよ 「そうして貰えると助かる。」

羊 「気が重いよ。」

かよ 「ねえ。」

羊 「ん？」

かよ 「お姉ちゃん、連絡とれてる？」

羊 「・・・うん。返信はないけど。」

かよ 「そうなんだ。こういう状態だから、連絡しといた方がいいと思う。それで力貸して、いや。それはまだ無理かもだけど。知ってて欲しい。私からも連絡した方がいいのかな？」

羊 「いいよ。俺から言っとく。」

かよ 「でも。」

羊 「姉ちゃんが出てく時、かよ大喧嘩したでしょ？向こうも気まずいと思うからさ。」

かよ 「そっか。そうだよねえなんであんな事言っちゃったんだろ。もう五年前かあ。」

羊 「あでも、旦那さん連れて来たら。」

かよ 「わかってる。お父さん、嫌いだもんねバツイチ。」

羊 「うん。」

かよ 「出て行ったの、それも理由だし。」

羊 「親父がもうちよい柔軟になつてくれたらな。」

かよ 「はは。無理無理。・・・もうさあ、好きとか嫌いとかいう状態違うと思うけどなあ。」

羊 「あ。」

羊 「同感。」

かよ 「お兄ちゃん。」

羊 「何？」

かよ 「私、やっぱりお姉ちゃん帰ってきて欲しい。大変だと思うけど。ちゃんと話し合いたい。」

羊 「・・・。」

かよ 「伝えて貰えるかな。かよからって。」

羊 「わかった。」

かよ 「ありがとう、助かる。」

スマホが鳴る。

かよ 「お兄ちゃん。」

羊 「ん？」

かよ 「電話。カナちゃんからみたい。」

羊 「ああ、うん」

出て行く羊。

かよ 「はく・・・ん？これ。」

かよは見慣れない財布を見ている。
健治入ってくる。

健治 「かよ。」

かよ 「あ、お父さんどうしたの？」

健治 「さっきは、スマンかった。」

かよ 「いいよ、お母さんを馬鹿にされた気になったんでしょ？」

健治 「羊にも言っといてくれるか？」

かよ 「自分で言いなよ。」

健治 「・・・。」

かよ 「わかった。言っとく。」

健治 「後な。」

かよ 「何？」

健治 「母さんの事やけどな。セカンドオピニオン受けさせよう思うんねん。今日入院
先で相談したんやけどな。」

かよ 「そっか。いいと思う。」

健治 「そやろ。場所的に他にも転移したらんかとかも含めてこの際やから徹底的にな。」

かよ 「うん。」

健治 「やっぱり、一つの病院やと不安やからなあ医療ミスとかもあるっていうし。」

かよ 「うん。」

健治 「ま、そういう訳やから。」

かよ 「お母さんに着替え用の服とか用意しなきゃね。」

健治 「あっ！しまった。それ忘れとったわ。もう替えの下着が無いとか言ってたわ。
準備せな。」

かよ 「うん。」

健治 「かよ。」

かよ 「ん？」

健治 「大丈夫や、お母ちゃんはそんな弱い人やない、絶対に絶対対に元気になって帰
ってくるわ。」

かよ 「お母さん。」

健治 「ん？」

かよ 「お母さん！なんで！こんなになっちゃったんかな。」

健治 「・・・せやな。」

かよ 「元気に、なるよね。それで元気な状態でまた会えるよね。」

健治 「当たり前やろ。」

かよ 「うん。」

健治 「準備してくるわ。」

健治出て行く。

かよ 「……あくもう。きついなあ。」

館山入ってくる。

館山 「あのうすいません、財布ここにはないですかね？」

かよ 「……。」

館山 「いきなり入り込んですいません。羊君に電話しても繋がらなくて待っても終電逃しちゃうそうだったんで。」

かよ 「……。」

館山 「チャイムも鳴らそうと思ったんですけど、あのお恥ずかしい話なんですけど、お父さん怖くて。本当ごめんなさい。」

かよ (財布を渡す)

館山 「あつども。じゃあ直ぐに失礼しますんで。すいません。ってあれ？」

かよ 「……。」

かよは財布を手放さない。泣いてる。対応に困る館山。

明かり変化。

④電話

下手よりカナが待っている、羊が上手より入ってくる。その中で館山、かよは出て行く。

カナ 「羊ちゃん。」

羊 「おう、今日はゴメンな。」

カナ 「お父さんは大丈夫？」

羊 「親父？大分落ち着いたよ。もう大丈夫。」

カナ 「なら、良かった。」

羊 「あ、後ゴメンな。本当は言うべきと思ってたんだけど。」

カナ 「うん、言って欲しかった。」

羊 「そう、だよな。中々踏ん切りがつかなくてさ。他の人達は？」

カナ 「連絡来てない？」

羊 「は？誰。」

カナ 「館山さん。財布忘れたみたい。取りに行きますって。なんかでも入りづらいよ
くっついてきた。」

羊 「本当迂闊な人。来る前に連絡しておかなきゃ。後は？哲也と詩帆は？後ポン子。」

カナ 「大丈夫。詩帆も、もう落ち着いてたよ。ポン子もすんなり帰った。」

羊 「そっか。」

カナ 「あんなに取り乱した詩帆初めて見たもんね。あ、後哲也が『無理する時期じゃ
無かっただろ。みずくさいな。次は俺が相談にのるよ』って。私も同じ気持ち。」

羊 「そうかもなあ。これからは大事な事はちゃんと言うようにするよ。」

カナ 「うん。」

羊 「うん。」

カナ 「・・・後は？」

羊 「ん？」

カナ 「もう！」

羊 「え？え？」

カナ 「今日！」

羊 「あ。」

カナ 「私にはないの！？今日いきなりライン来て俺の代わりに飲み会の準備してとか
さ。しかも羊ちゃんの家でとか。私凄く頑張ったんだからね。」

羊 「ああ、ごめんよ。」

カナ 「皆にいつ来るんだ？いつ来るんだ？ってせっつかれてたんだよ。」

羊 「そうだったんだ。」

カナ 「羊ちゃん扱い雑過ぎだよ。なんなの。最初に感謝するべき人は私じゃん。」

羊 「ああ、ありがとうな。」

カナ 「軽い！」

抱きしめようとする羊、拒むカナ。

カナ 「いいよ。ここ外だもん。」

羊 「そっか。」

代わりに頭を撫でる羊。

カナ 「……最近二人っきりで会ってないよ。いつも誰かとばっか。」
羊 「そっかな？」
カナ 「そうだよ。ねえ、今度いつ二人になれる？」
羊 「今二人だよ。」
カナ 「じゃあこれから遊びに行ける？」
羊 「それは、ちよつと、家の事あるし。」
カナ 「……わかつてる。言ってみただけ。大事だもんね家族。」
羊 「……今はバタバタしてるから直ぐには会えないかも。落ち着いたら二人きりで会おう。」
カナ 「本当？」
羊 「うん。約束する。」
カナ 「やった。」

笑顔を見せるカナ

羊 「やつと機嫌、戻ってきた。」
カナ 「誰のせいだよ。」
羊 「誰かな？」
カナ 「よ・う・ちゃんのせい！」
羊 「ははは。」
カナ 「あ、もう終電だから帰るね。」
羊 「とりあえず、また連絡するよ。」
カナ 「うん、じゃあね。」

カナはける

トウミが立っている。立ち止まる羊。

羊 「……。」
トウミ 「ねえ。」
羊 「……なんだよ。」
トウミ 「ねえ。」
羊 「だから、なんだよ。」
トウミ 「なんでそんなに怒ってるの？」
羊 「怒ってないよ。」
トウミ 「……。」

スマホが鳴る。また歩き始める羊、その後ろを付いてくるトウミ。

羊 「もしもし？ああ、うん。急にどうした？今日？ああ、打ち合わせが終わって今帰り。飲み会？ああ、あれは無くなっちゃった。何か哲也がやっぱりハビリで忙しいみたいで。」

羊、歩きが早くなる。ついていくトウミ。次第に早くなる。

羊 「ああ、うん。え、何？今から？それはちよつと厳しいかなあ。今ちよつと親父が大分調子悪くて、実はさつきも殴られた所、いや、もう大丈夫、でも今日は親父見とかないと駄目かな、ええ？ああ、ちよつと外出てるから、何でって電話してるから、家の中バタバタしてるし。今？うん、好き、だよ。愛してる。心配すんなって。うん！ありがとね！ちよつと、親父見ないと行けないから！うん！うん！じゃあ！だから、ついてくんない！ついてくんないよ！」

トウミ 「・・・ねえ。」

羊 「・・・。」

トウミ 「ねえ、それは。本当？」

羊 「それしか、それしか選択肢なんてなかったじゃないか！じゃあどうすれば良かったんだよ！教えてくれよ。トウミ。」

スマホが鳴る。

羊 「何！誰だよ？・・・あ、姉ちゃん？」

トウミの影はいつの間にか、いなくなっている。

羊 「あ、いや、ゴメン。ちよつと、寝ぼけてたみたい。もう大丈夫。うん。うん。親父の調子？元気にしてるよ。ピンピンしてる。え？母さん？ああ、お母さんな、実は。」

羊、はける。

明かり変化

舞台中心に明かり。

⑤姉

舞台中心に入ってくる知子、遅れて入ってくる磯輔。

知子 「うん、うん、そうなんだ。わかった。じゃあ、今は家には戻らないでおくね。羊も大変だ。じゃあ、また連絡するね。はい。」

磯輔 「どうだった？」

知子 「まだ、家には帰らない方が良いつて。」

磯輔 「そっか。」

知子 「うん、かよもまだ会いたくないって言ってたみたい。」

磯輔 「そうなんだ。大丈夫？」

知子 「まあ、ずっとだからね。もう落ち込んではいないよ。」

磯輔 「いつか、ちゃんと認めて貰おう。今すぐは無理かも知れないけど。」

知子 「・・・はいはい。」

磯輔 「なに？」

知子 「む。はいはい。」

磯輔 「わかったわかった。はい！知子さん。」

知子 「はい！えと、今日の羊の電話で良い話と悪い話がありまゝす。」

磯輔 「悪い話かく。聞きたくないなあ。」

知子 「それは駄目。ちゃんと受け入れないと。」

磯輔 「うわっ。まあ、そうだね。」

知子 「どっちから？」

磯輔 「うくん、悪い話を聞いてから良い話を聞くと悪い話を忘れちゃいたくなるから。

良い話を聞いて心を落ち着かせてから悪い話を受け止める、受け止めたから良い話から。」

知子 「賢こぶちやつてえ。ちよつとキモいぞ。」

磯輔 「そこは弄らなくていいでしょ。ハイハイ良い話からどうぞ。」

知子 「はい。えとね。お父さんが最近暴力振るわなくなったみたい。」

磯輔 「嘘！」

知子 「嘘じゃないよ、羊が言ってた。最近、ちよつと老けこんで来てて丸くなったって。」

磯輔 「いやあ、それは。そっかあ。なら尚更帰りやすくなったね。もし急に行ってもどうか・・・。」

知子 「それは羊がまだ駄目って言ってたでしょ。」

磯輔 「殴られないなら話合いになるじゃん。」

知子 「それはそう、だから良い話。」

磯輔 「希望が見えてきた。」

知子 「後、もう1個の方が。」

磯輔 「あゝハイハイ。」

知子 「こらあく逃げちゃ駄目。」
磯輔 「わかってる。」
知子 「お母さんが入院してるみたい。」
磯輔 「え？」
知子 「何か羊は濁してたけど。」
磯輔 「そう、なんだ。」
知子 「うん。」
磯輔 「最近、ずっとお母さんから連絡無いつて言ってたもんな。」
知子 「そんな頻繁にはしてなかったけど、ここ半年くらいは連絡なかったから。ちょっと心配してたの。」
磯輔 「それは心配だね。」
知子 「うん、大事じゃなければいいけど。」
磯輔 「……。」
知子 「……。」
磯輔 「知子。」
知子 「何？」
磯輔 「あのさ、べっちんでもやる？」
知子 「は？何それ？」
磯輔 「子供の頃に流行った遊び。」
知子 「知らない。」
磯輔 「メンコだよメンコ。」
知子 「ああ。」
磯輔 「凄く楽しくて元気が出たんだよ。」
知子 「やらない。」
磯輔 「何だよ。」
知子 「唐突感が酷いし、そもそも元気づけるにしても何か的が外れてる気がするよ？」
磯輔 「」
磯輔 「うわ。まじかあ。」
知子 「残念でした。」
磯輔 「あゝ。」
知子 「羊からの連絡はこんな感じでした。」
磯輔 「よく出来ました。」
知子 「はい。あ、ご飯どうする？昨日の残り物あるけど。」
磯輔 「カレー？」
知子 「うん。」
磯輔 「じゃあ、カレーで。」

知子 「じゃあ？」
磯輔 「ん？」
知子 「じゃあ？って何？」
磯輔 「や！ごめんなさい。カレーがいいです。」
知子 「はい。あ、後トイレ掃除して無かったでしょ？やっておいてって言ってたじゃん。私掃除しておいたから。後、今日ゴミの日だったからね。」
磯輔 「・・・重ねて、ごめんなさい。」
知子 「それだけ？」
磯輔 「ん？ああ、えと、トイレ掃除とゴミ出ししてくれてありがとう。」
知子 「はい。よく出来ました。」
磯輔 「うあく駄目駄目だあ。」
知子 「愛想つかされないようにしてね。」
磯輔 「頑張ります。」
知子 (笑)
磯輔 「あのさ。」
知子 「何？」
磯輔 「お見舞い、行こっか。」
知子 「え？」
磯輔 「入院先は聞いたんでしょ？」
知子 「うん、子供の時、私が盲腸で入院したトコって。」
磯輔 「お母さんに久々に会いたいでしょ？」
知子 「・・・うん、けど。」
磯輔 「大丈夫だって今なら家にいるわけじゃないからお父さんにも会わないし。お母さんは反対してた訳じゃ無いでしょ？」
知子 「うん、むしろ応援してくれてた、お父さんのいる手前ハッキリとは言わなかったけど。」
磯輔 「でしょ。一回先にお母さんに会って今後の事、話しておいても良いと思う。」
知子 「そっか、そうだよね。」
磯輔 「少しでも前向きに。後悔しないように外堀からでも埋めていかないと。」
知子 「そうだね。」
磯輔 「よし！」

磯輔、知子はける。
明かり変化

⑥ ガールズトーク

電車の音が聞こえる。

カナとポンコと詩帆、入ってくる。

ポンコ 「なんで今日なの。今日は超忙しい日だったんだけど。」

詩帆 「ごめんね。」

カナ 「ポンコ、今日以外の他の日は全部彼氏に会うって言ってたでしょ。」

ポンコ 「だって涼ちゃん寂しい寂しい言うんだもん。」

カナ 「じゃあ仕方ない。」

ポンコ 「後、ポンコじゃないですう。のりこ。憲法の法に子供の子とかいてのりこですう。」

カナ 「どうでもいいでしょ。皆ポンコって言ってんだから。それにだから今日、飲み会来れなかった人の為にお茶会しようって言ったのポンコじゃん？」

ポンコ 「ライン来てる。」

詩帆 「・・・噂の涼ちゃん？」

ポンコ 「うん。」

カナ 「なんて。」

ポンコ 「さびちいって。」

カナ 「あーそうなんだ。」

ポンコ 「うん。昨日ずっといたのに足りなかったのかなあ。」

カナ 「知らないよ。」

チハル、やってくる。

ポンコ 「あ、チハル元気。」

チハル 「ポンコちゃん久しぶり〜いつぐらいかなあ。」

ポンコ 「2年ぶりだよ。あとポンコじゃないよ、法子だよ。」

チハル 「ちよつと痩せた？可愛くなったね。」

詩帆 「(頷く)」

ポンコ 「ありがとう、最近ほんと皆に痩せすぎって言われる。でもまだまだダイエット中。必要ないって涼ちゃんからは言われてるんだけど。」

詩帆 「チハル。チハル。」

チハル 「あ、詩帆。」

詩帆 「にや〜。」

カナ 「会いたがってたもんね詩帆。」

詩帆 「うん！」

チハル 「カナちゃんも久振り、今日はこれだけかな？酒井さんは？」

カナ 「ちょっと遅れるって。もう来ると思うけど。」
チハル 「そうなんだ。じゃあ、もうちょっと待つ感じ？」
詩帆 「うん」
ポンコ 「酒井さんってバイトの時もそうだったよね。いつつもギリギリ。」
チハル 「そうだったね。」
ポンコ 「そのくせ残業になったら一番ブウブウ言ってるよ。」
チハル 「そうだったかな。」
ポンコ 「そうだよ。覚えてない？」
チハル 「覚えてないかも。」
ポンコ 「有名だったじゃん。ねえ？」
カナ 「聞いた事はあったかな。」
ポンコ 「ほら〜ホント酷かったんだよ、あでもそっか酒井さんチハルちゃんの事怖がってたからそういうトコ、出してなかったのかもね。」
チハル 「そうなんだ。」
ポンコ 「今日どこ行くの？まあカラオケはマストだよ。」
カナ 「決めて無いんだよ。」
ポンコ 「じゃあ肉。」
カナ 「あれ？ダイエツト中じゃなかったっけ？」
ポンコ 「ライン来た〜。」
詩帆 「また涼ちゃん。」
ポンコ 「ん〜ん賢ちゃん。」
詩帆 「賢ちゃん？」
チハル 「誰？」
ポンコ 「最近言い寄ってきてる人、アプリしてたらナンパされちゃって。私最近色々な人に言い寄られてるんだよ。」
カナ 「アプリ？」
ポンコ 「うん出会い系の・・・や、違うよ。モテ自慢とかじゃないから！凄くうざくて困ってるって話。」
カナ 「あ、うん。」
ポンコ 「ええと、レンラクアリガトウコンドマタフタリキリデアオウネハート。」
三人 「・・・。」
カナ 「どうしょ。」
詩帆 「私ガッツリなのはちょっと。」
チハル 「私もそんなにお腹空いてないかな。」
カナ 「じゃあ、酒井さん来たらカフェに入ろっか。」

詩帆のスマホが鳴る。

詩帆 「・・・え？」

カナ 「なに？どうしたの？」

詩帆 「・・・ちよつと待って。え、嘘。」

チハル 「どうしたの？」

詩帆 「ごめん、ちよつと帰るね。」

ポンコ 「ええ！何もう帰るのちよつと空気読めなさ過ぎじゃない？」

詩帆 「本当ごめん！」

カナ 「いいよいよ。てっちゃん？」

詩帆 「うん、あ、後、飲み会の時、せっかく企画してくれたのに、怒ってごめんね言
っておいて羊君に。」

カナ 「大丈夫、気にしてないと思うよ。」

チハル 「企画？」

詩帆 「チハル一杯しゃべりたかったよ。」

チハル 「私も。」

詩帆 「本当に本当にごめんね。」

詩帆、はける。

チハル 「・・・ねえ。飲み会って何？」

カナ 「え？」

チハル 「羊ちゃんが企画したの？頼まれたんじゃないよ？」

カナ 「うん、羊の家で飲み会したんだよ。羊から連絡あったでしょ？」

チハル 「来てない。飲み会、無くなったって聞いた。」

カナ 「え、本当？チハル忙しいから来れないって。」

チハル 「言っていない。」

ポンコ 「無くなってなんかはないよ。なんか超盛り上がったんだけど羊のトコのお母
さんにすつげえキレられて超怖かったよー。ああ、またラインきちやった。」

チハル 「それは知ってる。」

カナ 「え？」

チハル 「羊ちゃんから聞いたから。」

カナ 「本人から？」

チハル 「・・・うん。」

カナ 「そう、なんだ。」

チハル 「お父さん調子悪いんでしょ？」

カナ 「調子悪いって言うか、お母さん癌で闘病中だって。でそんな時に家で飲み会するなんて不謹慎だって。」

チハル 「聞いてない。」

カナ 「うん？」

チハル 「お母さんが癌だなんて聞いてない。」

カナ 「そう。」

チハル 「羊ちゃんはそんな事、電話で話して無かった。毎日電話してるのに。」

カナ 「え。」

チハル 「うん。」

ポンコ 「毎日って、ウケるくチハル羊ちゃん狙いだっただの？駄目だよ。羊ちゃんカナちゃんと付き合ってるんだから。他の人にしなよ。私、結構イケメン知ってるから紹介しようか？あ、でも、本当に好きなんだったら略奪もなくは無いか。私は好きじゃないなあ。今迄の友人関係とか？壊れちゃうじゃん。そういうの一番ダルいもん。カナちゃんも羊ちゃんにぞつこんぼいし。てか酒井さん遅刻くマジ無いんだけど。うわ、返信早すぎ。」

チハル 「何それ。」

カナ 「そう、だよ。。。え、どういう事？」

チハル 「。。。。」

カナ 「え、何々どういう事？」

チハル 「好きって。」

カナ 「え。。。何？」

チハル 「好きって言ったの？」

カナ 「誰が？」

チハル 「羊ちゃん」

カナ 「。。。うん。」

チハル 「カナちゃんに？羊ちゃんが？」

カナ 「うん。」

チハル 「私じゃなくて？」

カナ 「。。。。」

チハル 「私に、じゃなくて？私のハンバーグ凄く美味しいって言ってくれて。私をぎゅって優しく出し決めてくれて、疑り深い私を信じさせてくれる、受け止めてくれる、そういう好き？」

カナ 「。。。。」

ポンコ 「ああ！もう賢ちゃんウザい。ケンチャンダイスキだよ。スキスキダイスキ。」

⑦アキと羊

薄暗い中 影絵。男女が艶めかしく絡み合っている。どうやら男は後ろから女を責め立てているようだ。吐息が聞こえる。途中、男は女の首にゆっくり手をかける。嬉しそうに声をあげる女。明かり変化。

羊 「……。」

アキ 「激しかったね。」

羊 「……そうかな。」

アキ 「そうだよ。嫌な事あったでしょ？」

羊 「ないよ。」

アキ 「大体私の所来る時は嫌な事あった時でしょ？」

羊 「そんな事ない。」

アキ 「嘘。」

羊 「嘘なんてついてない。」

アキ 「何だよ真実じゃない。」

羊 「俺がまるで、まるでアキを、ストレスのはけ口しか見てない男みたいやんか。」

アキ 「あはははは。そのものズバリじゃない。性欲の捌け口。あははは。」

羊 「笑うなよ。」

アキ 「なら、私の事好きで会ってくれてるの？」

羊 「……。」

アキ 「今迄一回でも好きって言ってくれた事ある？ないよね？」

羊 「それは。」

アキ 「好きって言っただらんだよ。」

羊 「……。」

アキ 「ほら。」

羊 「……。」

アキ 「ほら。無理。」

羊 「俺。お前の事、好……。」

アキ 「あははは。いいよいいよ。そんな上辺つつらの言葉なんて欲しくないし。吐き

気がする。あははは。」

羊 「笑うなって。」

アキ 「何？イッチヨマエに怒ってんの？あははは。」

羊 「笑うなや！！」

アキ 「……」

羊 「馬鹿にして笑うなや、メツチャムカつくわ。」

アキ 「最低。最低のクソ男だね。羊ちゃんは。知ってたけど。」

羊 「抱きついて来んな。」

アキ 「何だよ。怒ってる羊ちゃん慰めてるだけじゃん。」

羊 「イライラするから近づいてくんなんて。」

アキ 「嫌ややで、絶対離れへくん。」

羊 「ヘツタクソな関西弁やな。」

アキ 「あんたに言われたくないわ。怒ってる時しか出えへんくせに。」

羊 「五月蠅い。親父のせいや。」

アキ 「よしよし。」

羊 「だから、触んなんて。」

アキ 「駄あ目。あく辛かったですぬあく辛かった。」

羊 「あく！もう。」

アキ 「アハハハ……私さあ。昔大好きな人がいたの。その人関西の人で関西弁聞くとちよつと思ひ出すんよねえ。」

羊 「……」

アキ 「その人は無理した明らかに関西人丸出しの標準語で喋ってて所々で訛りが見え隠れするんよ。でそれ指摘したら顔真っ赤にして『えっ何処が？何処ら辺が？』って聞いてくるんよ。それが可笑しくて。もうその段階で訛ってて。そういう所が、ちよつとあなたに似てる。」

羊 「うん。」

アキ 「いっつも酒飲んでるし、ギャンブルで馬鹿みたいに金使うし、気に食わない事あるとすぐ暴力振るって。私止めて！って言ったけど止めてくれる訳なくて余計殴られて毎日毎日泣いて泣いて泣き疲れて。次の日に顔見たら涙やら鼻水やら青タンやら顔がパンパン。そんな状態でもな、あの人、私を求めて来るの。そういう時に限って、ゴメンな、ゴメンなアキって。首絞めながら謝るのあの人。おつかしいよね？謝るぐらいなら殴らなきゃ良いのに。ほんつと最低な男。」

羊 「うん。」

アキ 「でも大好きだった。人生であれ以上の人は出てこないと思う。あの人がいなくなっただけから私は空っぽ。」

羊はアキを押し倒し首を締める。

アキ 「あ、ん。どうしたん？まだするの？」

羊 「俺が埋める。」

アキ 「え。」

羊 「俺がそいつの穴埋める。」

アキ 「・・・あんたには無理。」

羊 「何でや！」

アキ 「無理。」

羊 「だからなんでやって聞いてんねん。」

アキ 「あんたは私を見てない。」

羊 「・・・。」

アキ 「あんたは私を見てない。私を通して別の人を見てる。それぐらい判るよ。」

羊 「んな事ない。俺はお前を見てる。」

アキ 「嘘ばかり。本当嘘ばかり。もう無理するの止めたら？」

羊 「黙れや！」

アキ 「あんた、は、優しいなあ。首締めるのも、急に関西弁使い始めんのも私の事思
ってしてくれてるんでしょ？本当はそんな趣味も無いのに。なあ、あんたは誰を見て
るの？」

羊 「黙れ。」

アキ 「あ、あ、あ。」

羊、アキの首を締めるのをやめる。咳き込むアキ。

アキ 「残念。多分、もうちょっといけたよ？」

羊 「・・・。」

アキ 「もう時間だけど、どうする。まだする？」

羊 「・・・帰ってくれ。」

アキ 「あははは。ラブホで帰ってくれて、あんたの家じゃないけどココ。」

羊 「いいから、金は払っとくから。」

アキ 「はいはい。すっきりしたんなら私は帰りますよ。良かったね。すっきりして。」

着替え始めるアキ。スマホが鳴る。一瞥する羊。

アキ 「鳴ってるよ電話。」

羊 「・・・。」

アキ 「取らなくていいの？」

羊 「いい。」

アキ 「チハルちゃんからじゃない？あ、もしかしたらカナちゃんかな？」

羊 「知り合い？」

アキ 「まさか。会ったことなんて無いよ。スマホ見たもん。」

羊 「お前、最低だな。」

アキ 「どっちが最低？浮気男。私？違うよね？むしろ貴方でしょ？最低なのは。」

羊 「……。」

アキ 「あんたが辛いのはあんたの勝手。それに付き合わされてるのは誰なの？」

羊 「人のスマホみるとか。」

アキ 「そういう次元の話なの？違うよね。あのさ、もう色々な事で取り繕って誤魔化すのやめてくれる？それは本当に迷惑。」

羊 「ゴメン。」

アキ 「何それ、私誤って欲しい言った？それも優しさなの？そんな優しさなんていない。気持ち悪い。」

羊 「ゴメン。」

アキ 「あゝ一気に醒めちゃった。」

羊 「ゴメン。」

アキ 「いいって。」

羊 「ゴメン、」

アキ 「だから！やめてって！」

羊 「……。」

アキ 「……期待するでしょ？こんなどうしようもない、ぐちゃぐちゃになった女でも期待とか、しちやうでしょ？」

羊 「……。」

アキ 「どれだけあんたは残酷なの？自分だけが傷ついてる訳違うからね。私これで帰るから。じゃあね。最低男。」

アキ 出て行く。取り残される羊。

明かり変化

⑧羊とトウミ

羊は明かりの中に一人。

トウミが浮かび上がる。

羊 「トウミ」

トウミ 「……。」

羊 「俺がトウミと出会ったのは、もう十年以上前になる。会った時は正直可愛いとか、そんなんじゃないやなくて、よくいる友人の一人って思ってた。でも、一緒の学校でたまたま同じサークルに入るようになって一緒に色んな仕事とかイベントとかするようになってなんていうか凄く気になる存在になっていった。」

トウミ 「羊ちゃん！羊ちゃん、ここの立て看板どこに置いたら良いかな。ここだとちょっと見にくいから。こっちの方が良いと思うけど。どう思う？」

羊 「トウミは笑顔が可愛い子だった。俺はその笑ってる顔が見たくて笑わせよう笑わせようとしてた。失敗する事も多かったけど笑ってくれた時は凄く幸せになれた。何ていうか、いつの間にか夢中になってた。学年が上がるにつれてトウミはどんどん可愛くなるとトウミはよくイジケテた。」

トウミ 「あの時は化粧とかよく解ってなかったから。あんまり思い出さないで。」

羊 「そうやって、なんかふくれっ面して前髪で顔隠そうとよくしてた。そんなんじや隠せるわけがないのに。俺は他の男に取られるんじやないかってその時にはビクビクしてた。実際、何人か告った人がいるってのも聞いた。でも全部断つたらしい。トウミも俺の事、気になってたみたいで付き合うことになった。その時の舞い上がり方は、何ていうか本当に今から考えると異常だけど周りの友人に内緒って言いながら言い回ったり、トウミが部屋から出て行った後、トウミの使ったいい匂いのするタオル嗅いだりしてた。正直馬鹿になってた。知り合ってから3年位経ってた。」

トウミ 「羊ちゃん、ちよつといい。」

羊 「付き合うようになって2年位して、俺はトウミの異変に気がついた。当然トウミも気にしてた。トウミはその間、一回も生理がきてなかった。」

トウミ 「あのね、羊ちゃん・・・私、子供産めない体だった。女として欠陥品なの。」

羊 「婦人科から帰ってきたトウミはそう言って泣いてた。俺はその時、只々泣いてるトウミを慰めて抱き締める事しか出来なかった。トウミはずっとうわ言のように「ごめんね羊ちゃん私で、私を好きになって。ごめんね羊ちゃん」って言った。俺も一緒に泣いてたけどトウミの方がその何倍も辛かったと思う。」

トウミ 「あのね。私の夢は羊ちゃんとの赤ちゃんを産む事。」

羊 「トウミが付き合い始めてた事は絶対に叶わない夢になった。その頃からトウミは塞ぎ込むようになった。俺は落ち込んでるトウミが見てられなくてどうしたらいいか？って事を沢山考えた。それで思ったのはトウミの望みも大事だけどトウミと人生を添い遂げる事が大事だって事。俺はトウミに結婚しようって言った。」

トウミ 「本当に？私で良いの？」

羊 「久々に嬉しそうに笑うトウミを見て自分の選択は間違いないって思った。トウミと相談して両親にも子供の事も全部含めて正直に話そうって事になった。正直に真剣に話をすればトウミの両親も自分の所の両親も応援してくれる認めてくれるって思った。嘘なんかついて後ばれたら後悔するから。」

トウミ 「なんか前向きになってきた。」

羊 「トウミの親は好意的だった。養子を迎える話とか、まだ妊娠する可能性があるんじゃないかって話をした。少し元気になった顔見て幸せになれた。それで自分の両親にも

正直に話した。俺の両親は反対した。」

トウミ 「……」

羊 「びっくりした。そんな事考えた事も無かったから。父も母も反対してた。トウミが目の前にいるのに子供できないのは駄目だと言った。あんたは長男なんだからって。母に至っては。もう来なくていい、会わないとまで言った。許せなかったけど、絶縁迄していなくなる勇気が無かった。姉の知子が家を飛び出してるとても理由の一つだと思っ。どうしても両親を切り捨てられなかった。トウミと俺はこの時、前にも後ろにも進めなくなった。」

トウミ 「ねえ、これからどうしょ。」

羊 「この頃からトウミと俺は喧嘩が増えるよになった。テレビとか新聞とか友人とかの結婚とか出産の話題が出る度に険悪になって、会話も減っていった。」

トウミ 「……」

トウミ パネル側にはけていくが途中立ち止まりふり返る。

羊 「俺はトウミと別れる事にした。前にも後ろにも進めないのならいっそのこと別れようって言った。その方が幸せになれるって言った。俺よりずっと！ ずっと、素敵なお旦那さんに出会えるって言った。トウミは何にも言わずそれに従った。」

トウミ はける。

羊 「俺はトウミがいなくなってから本当の事を言う事が怖くなった。正直に真実を話してもそれが不幸なるって思うようになった。トウミと別れてからも俺はトウミの事が忘れられなかった。だから、トウミに笑い方が似てる人、自分を求めてくる人、セックスが似てる人、そういう人間を探すようになった。でも、そのどれもがトウミでは無かったし代わりにはならなかった。あの時、普通に体の事を伏せたままで両親に結婚の報告をしていけば両親は心から喜んでくれて、今頃幸せに結婚できてたんじゃないか？ ってそんな事ばかり考えてる。なあトウミ俺は、俺はどうすれば良かったのかな？」

トウミの影絵浮かび上がる。それに近づき触れる。トウミの影は消える。羊は影を探すようにフラフラとはけていく。明かり変化。羊の立ち尽くす影が浮かび消える。

⑨ 哲也と詩帆

車椅子に引かれて哲也と詩帆がやってくる。

詩帆 「わぁいい天気。」

哲也 「うん。」
詩帆 「空が真っ青。綺麗。」
哲也 「本当だ。雲一つない。」
詩帆 「ね。」
哲也 「うん。」
詩帆 「こんな天気なら他の所行っても良かったね。」
哲也 「そうだね。詩帆。」
詩帆 「海とか。山登りでもいいし。きっと凄く気持ちいいと思うな。」
哲也 「詩帆。」
詩帆 「ん？」
哲也 「話がある。」
詩帆 「何？」
哲也 「俺さ、今まで詩帆に沢山迷惑かけて来たよね。」
詩帆 「・・・そんな事、ない。」
哲也 「覚えてない？仕事で絶対必要な書類忘れてわざわざ会社まで届けてくれたりさ。勝手に事故って体麻痺して大変なりハビリ付き合わせたりさ。」
詩帆 「そんなの大した事ない。」
哲也 「詩帆に急に絡んできた酔っ払い殴り飛ばして警察沙汰になりかけたり。」
詩帆 「それは私の為でしょ？」
哲也 「うん。でも迷惑かけてる。」
詩帆 「てっちゃん。」
哲也 「もう俺みたいなポンコツにさ、付き合わなくていいよ。」
詩帆 「え？」
哲也 「こんな俺じゃ、詩帆を幸せにできないよ。ごめん。」
詩帆 「なんでそんな事言うの？」
哲也 「だって、このままだと、もともっと迷惑かける。なのに俺はお前の為にできる事なんにもなくなっちゃった。」
詩帆 「そんな事ない、そんな事ないよ。」
哲也 「今までありがとう。」
詩帆 「てっちゃん。」
哲也 「さようなら。」
詩帆 「嫌！嫌嫌・・・私別れないから！」
哲也 「このまま一緒にいたらもっと辛い思いするんだぞ！お前の家族だって。」
詩帆 「辛くてもいい！家族に反対されたっていい！そんなのどうでもいいの！私は、てっちゃんとずっと一緒にいるの！さよならとか言わないで馬鹿。」
哲也 「・・・。」

詩帆 「てっちゃんが気づいてないなら言ったげる。私はてっちゃんが好きなの！愛してるの！誰よりも大切な存在なの。」

哲也 「詩帆……。」

詩帆 「だからずっと傍にいさせて、いさせてよう。」

哲也 「……なんで俺なんか、好きになっちゃったんだよ。」

詩帆 「そんなのわかんない。気づいたらそうだった。」

哲也 「そっか。詩帆。」

詩帆 「ん？」

哲也 「もし許してくれるなら、もうちょっとだけ、俺の傍にいて欲しい。」

詩帆 「嫌だ。……ちよっとじゃなくてずっと傍にいる。ずっと傍にいさせて。」

哲也 「ホントに、馬鹿なヤツ。」

詩帆 「うん。」

フラフラと羊が入って来る。

羊 「ん？おーい！哲也！二人共こんな所で何してんだよ。」

哲也 「……。」

詩帆 「羊君。」

羊 「あ、あれ何かお邪魔しちゃった？」

詩帆 「ううん、そんな事ないよ。」

哲也 「おっす。」

羊 「って哲也どうした？何か前より。」

詩帆 「……。」

羊 「え、ゴメン。」

哲也 「いいよ詩帆、どうせいつか解っちゃう事だろ。あのな。手術失敗した。」

羊 「え？」

詩帆 「お医者さんはそうは言ってないけど前より明らかに悪くなってるから。多分失敗。」

羊 「そんな。」

哲也 「首から下が動かない。」

詩帆 「自分で歩くのは多分。もう。」

哲也 「あんだだけ一杯リハビリしたのに無駄になっちゃったよ。ハハ。」

羊 「そっか、その、なんて言ったらいいか。」

詩帆 「そんな悲しい目しないで。別に人生終わったって訳じゃないから。てっちゃん
は私が介抱するから。ずっとずっと一緒にいるから。こんな事位でへこたれたりしない。」

羊 「そっか。やっぱり、詩帆と哲也は俺にとって理想だよ羨ましい。」

詩帆 「・・・今日は天気もいいし散歩してたの。まさか羊君に会うとは思わなかったけど。」

羊 「今日天気いいもんな。」

哲也 「うん。」

詩帆 「あれ、てっちゃん鼻水出てるよ。」

哲也 「あ、大丈夫。」

詩帆 「大丈夫じゃないでしょ。拭いてあげる。」

哲也 「うん。ありがとう。」

詩帆、ハンカチで哲也の鼻周りを拭く。

哲也 「・・・。」

詩帆 「はーい、これで綺麗になったよ。」

哲也 「ん。」

羊 「詩帆。」

詩帆 「なに？」

羊 「しんどくないか？」

詩帆 「んーそんな事ないよ。一緒にいれて私達は幸せ。ね？」

哲也 「うん。」

羊 「いつでも相談にのるから。」

詩帆 「ありがとう。」

羊 「哲也も。」

哲也 「うん。」

詩帆 「じゃあ、また。」

羊 「うん。」

暗転の中、声

哲也 「羊。」

羊 「ん？」

哲也 「いや・・・じゃあまた。」

羊 「うん。」

⑩姉の来訪

明かりが入る。

自宅

知子と磯輔が座っている。反対側には、かよがいてその隣には館山がいる。

磯輔 「すみません。唐突にお邪魔しちゃって。」

かよ 「……。」

館山 「あ、いや、いいんですよ。そんなに気を使わなくても。」

磯輔 「そうですかね？」

館山 「ええ。」

間

知子 「羊は？」

かよ 「わかんない。最近あんまり帰ってきてない。」

知子 「そう。」

かよ 「うん。」

間

館山 「あ、お茶とか飲みます？」

磯輔 「あ、いいですね。」

館山 「じゃあ、これ。」

磯輔 「ああ、これはどうも。知子も飲む？」

知子 「要らない。」

磯輔 「そうだよね、いらないよね。」

館山 「……。」

かよ 「要らない。余計な事しないでいいよ館山さん。」

館山 「あ、はい。」

かよ 「お父さん、もうすぐ帰ってくるよ。」

知子 「その前に羊は帰ってくるの？」

かよ 「だから、わからないって言ってんじゃない！」

知子 「……最悪。」

かよ 「はあ？」

磯輔 「ちよっと知子。」

かよ 「意味分かんない、帰って来るなりすっごい不機嫌だし。」

知子 「……あのさ、かよ。私はここに来るつもりは無かったの。あんたが会いたく無いって羊から連絡来てて知ってたから。」

かよ 「は？そんな事、一言も言っていないんですけど。」
知子 「何をそんなに突っぱねてんのよ。」
かよ 「突っぱねてなんかない。私はむしろ、帰ってきて欲しいってお兄ちゃんにお願いしただけだよ。」
知子 「は？そんな事一言も言っていなかったわよ。」
かよ 「え？」
知子 「羊からそんな言葉は聞いてないって言ってるの。」
かよ 「なにそれ。わけわかんない。」
知子 「何なのよ。どういう事？」
館山 「いえ、私に聞かれましても。」
磯輔 「落ち着けて知子。」
知子 「こんなの落ち着いてられないじゃない。」
かよ 「……。」
知子 「どういう事なの？」
館山 「あ、う。」
知子 「何？そもそもあんたは誰なのよ？」
館山 「あ、館山と言います。」
知子 「知らないわよ。」
館山 「すみません。」
かよ 「おねえちゃん！館山さんはいいの。私が相談してた人だから。」
館山 「あ、そうなんです。かよちゃ、あ、かよさんはお母さんの事で相談したくてお姉ちゃんに一旦帰ってきて欲しいって羊に、あ、羊君にお願いしてたみたいなんですよ。」
磯輔 「ん？」
館山 「なんですか？」
磯輔 「なんかやっぱり、釈然としないな。」
かよ 「どういう事？」
磯輔 「僕が聞いた話だとお母さんは病気で入院してるんだよね。」
かよ 「……うん。」
磯輔 「で、それで、かよちゃんはお母さんの事で相談したいから会いたいって事だよ。」
かよ 「うん。」
磯輔 「だったら、羊君が嘘つく理由なんてない、よね。」
かよ 「……。」
磯輔 「いや、わからないよ、何か羊君に思う所があったからかも知れないから。」
かよ 「そうですね。」
知子 「でも、その前にそもそも何で病院にお母さんがいないの？」

かよ 「……。」

館山 「……。」

知子 「それは入院とかそういう以前の問題でしょ？」

かよ 「それは。」

羊、帰って来る。

羊 「かよ。今日お客さん来てる……。」

知子 「羊。」

羊 「姉ちゃん。」

かよ 「お兄ちゃんこれどういう事！？もう何かグチャグチャだよ。何が起きてるの？
なんでお姉ちゃんに嘘ついたの！」

館山 「かよ。」

かよ 「私、お姉ちゃんに帰ってきて欲しいって言ったよね？連絡してくれるって言ったよね？」

羊 「……。」

かよ 「なんで黙ってるのよ、答えてよ！」

羊 「……言った、連絡するって言った。」

かよ 「で、それはお姉ちゃんに言ってくれたの。」

羊 「……言っていない。」

かよ 「もう、しんどい、耐えられない。」

知子 「どういう事か話してくれる？」

羊 「……お母さんが入院した。」

かよ 「違う！なんで。もう、いいじゃん。」

羊 「……。」

かよ 「そんな嘘もうつかなくていいじゃん。何の為にお姉ちゃん帰ってきたのさ！」

知子 「私、病院に行ったから。」

羊 「……そっか。母さんは、母さんはもういない。」

知子 「え？」

羊 「去年の九月十二日午前三時十四分胃癌で亡くなった。発覚が遅くて解った時は余命半年だった。あつという間だった。」

知子 「そんな。」

かよ、泣いている。それをあやす館山。

知子 「何で、何で言ってくれなかったの？」

羊 「・・・。」

知子 「母さんの死に目にもお葬式にも行けなかったなんて。」

羊 「ごめん。」

知子 「なんで言わなかったの!」

磯輔 「知子落ち着けてそんなに攻めたら言えるものも言えなくなるだろ。」

知子 「だって。」

磯輔 「羊君、話して貰えるかな。」

羊 「言えなかった。」

磯輔 「どうして?」

羊 「親父が母さんの死を認めなかったら。」

間

羊 「親父は母さんを愛してた、毎日毎日色々な方法で治す方法探してた。セカンドオピニオンとか、漢方とか色々、でもどれも駄目だった。必死で頑張ってたけど母さんの顔、どんどん、どんどん痩せていって。最後は歩けなくなって。ついには大部屋から個室に行くことになった。母さん凄く嫌がってた。個室に行った人、皆帰って来なかったから。最後まで大部屋がいつて言ってた。でも、どんどん体調悪くなっていつてもうどうにもならなくなって個室移って直ぐ。」

知子 「・・・。」

羊 「葬式の前から親父の様子がおかしくなった。まるでお母さんが生きてるように振る舞うようになった。最初は気のせいかと思っただけど、違った。親父の中では母さんは生きてた。」

かよ 「私、最初言ったもん。お母さんはもう死んだって。でも、お父さん全然、聞き入れてくれなくてむしろ、殴るようになって。」

知子 「え、殴られたの?もしかしてまだ続いているの?」

かよ 「うん。」

羊 「ごめん、だから、その、前の電話も。」

知子 「・・・。」

磯輔 「大丈夫か?」

知子 「ちよっと座る。」

磯輔 「ゆっくりでいいよ。お茶飲もう。」

知子 「うん。」

かよ 「・・・そんな状態の時、お兄ちゃん、お母さんがいるように振る舞い始めたの。」

羊 「もう、どうしようもなかった。事実を事実として受け入れられないなら、いつその事、嘘の世界でも、まやかしのの中の世界でも良いと思って親父の話に合わせるように

なった。」

知子 「お父さん、病院とかは？」

羊 「行かせようって思うけど、まだそこまでいってない。」

知子 「そう。」

羊 「だから、姉ちゃんには本当事言えなかった。いきなり帰ってきたら親父が動揺するかもしれないから。」

間

知子 「・・・ちゃんと本当の事伝えなきゃ。」

羊 「え？」

知子 「お父さんにちゃんと真実を知ってもらおう？」

かよ 「・・・私も、それがいい。」

羊 「かよ。」

磯輔 「羊君、正直に話をして理解をしてもらおう事が大事な事なんじゃないかな？」

館山 「私も部外者だけど。かよさんと同じ。」

羊 「お前。」

館山 「あついや。」

知子 「羊はどう思うの？」

羊 「俺は、俺は。」

健治帰って来る。

健治 「なんや、凄いや客来てるけど何かあったんか？ん？」

知子 「おとうさん。」

健治 「知子！・・・お前何しに来たんや？」

かよ 「あ。」

健治 「誰に断って帰って来たんや！」

知子 「え？」

健治 「出て行けいとうんじゃ。」

知子 「ちよっ！お父さん止めて。」

健治 「五月蠅い。」

磯輔 「お父さんお願いします。やめて下さい！やめて下さい！」

健治 「黙れ、バツイチ！」

館山 「わっわっ落ち着いて！お父さん。」

健治 「なんや、誰やお前！」

館山 「館山です！」

健治 「知らん！」

かよ 「ああ、お姉ちゃん！」

知子 「嫌！嫌。」

羊 「やめろ親父！」

健治 「あ？」

羊 「もうやめてくれ、親父。」

かよ 「お兄ちゃん。」

羊 「俺が姉ちゃん呼んだんや。」

健治 「・・・どういふことや？」

羊 「俺が！母さんの事で、呼んだんや。」

知子 「羊。」

羊 「親父、母さんな、お母さんはな。」

健治 「どうした？お、お母さんがどうしたんや。」

羊 「・・・やっぱり、無理や、なあホンマに。真実なんて知る必要あるんかな。言っても不幸になるだけちがうんかな？俺には言われへん。言われへんよ。」

羊、逃げ出す。

知子 「ちよっと！羊！」

明かり変化

⑪逃走

カナ入って来る。遅れて羊も入って来る。

羊の呼吸は激しい。

車が行き交う音がする。

10場の人々は動かない。

カナ 「羊ちゃん。」

羊 「カナ。」

カナ 「何してるの？こんな所で。」

羊 「俺、今すげえ辛くて。」

カナ 「ふーん。」

羊 「カナがいなきや駄目だ。」

羊の影舞台面に出てくる。

カナ 「こつち来ないで。」

羊 「え？」

カナ 「聞こえた？」

チハルの影

チハル 「最低。本当に最低。」

羊 「チハル・・・。」

チハル 「どうゆう事かちゃんと説明して。」

羊 「何を。」

チハル 「本当の事話して。」

羊 「ほんとう、の事？」

チハル 「そうよ！何でこんな事したの！」

カナ 「ちゃんと答えて！羊ちゃん。」

チハル 「羊ちゃん！」

羊 「知らない！俺何も知らない！」

逃げる羊。

明かり変化。

羊の影絵パネル明かりのみ。

羊 「俺は、皆が幸せになるよう望むようにしただけだ。俺さえ我慢すれば皆幸せに。なのに何で何で。」

突如、車の音が無くなり、まばゆい明かりが羊を包む。影絵が吹き飛ぶ。

明かり変わる。アキが立っている。それと共に舞台面に人々が歩いていく。

羊が入って来る。

アキ 「春は嫌い。この暖かくてポカポカしてて、頬に触れる風が心地よくて。皆浮足立ってるのがわかるから。」

羊 「何でバラした？」

アキ 「夏も嫌い。暑くて、皆イライラしてて、自分の体から自然と湧き出る液体が不快。」

羊 「答えろ。」

アキ 「冬も嫌い。寂しくて、体を重ね合わせてる時しか相手の暖かさを感じられないから。」

羊 「アキ！」

アキ 「・・・秋が好き。少し火照った体を冷ましてくれるから。名前を呼んでくれる人がいるから。」

羊 「なんで、チハルとカナにバラした。」

アキ 「私なあ、あんたが傷ついている姿、もう見てられなくなった。」

羊 「ふざんけん！お前が知らせる必要が何処にあつてん！」

アキ 「アハハハ。それ、あの二人に面と向かっていいなよ。」

後ろにはチハルとカナが羊を見つめている。

羊 「！」

アキ 「私ね。確かに電話はした。したけど。バラす必要なんてなかった。だってあの二人もう知ってた。」

羊 「は？」

アキ 「あんたの嘘はもうバレた。」

羊 「は、は、そんな、俺は、俺は。」

アキ 「ざんねん。」

羊 「あ、嫌、チハル、カナ。俺ちよっと勘違いしてて、その、ちよっとした行き違いで。」

チハル 「嘘。」

羊 「嘘なんかついてない！カナ、俺らまだやり直せる。あ！そう！哲也と詩帆みたいに。いい関係を理想の関係を築ける。」

カナ 「嘘。」

羊 「だから、嘘じゃないって！」

カナ 「気付いてるくせに。」

羊 「は？」

哲也が出てきて倒れこむ。後ろから詩帆と車椅子。詩帆は哲也に馬乗りになり一頻り殴った後、満足そうに微笑み哲也を座らせ介抱しながら舞う詩帆。哲也は羊を見る。哲也は少し、何かを言おうするが直ぐ諦め。残念そうに微笑む。うつむく哲也。詩帆、うつむく哲也の顔を持ち上げ、また叩く。声にならない声。

いつの間にか両サイド影絵には人が集まってきている。

羊 「あ、あ。」

カナ 「羊ちゃんは気付いてたよね？私とあんな風になりたいの？あれが羊ちゃんが望む理想の関係？」

羊 「違う、違う、違う！」

チハル 「本当に、可哀想な人。」

羊 「あ、待ってくれ、話を俺の話聞いてくれ。」

チハル、アキ、カナ各々は後ろの影絵に集まっていく。最初一人に見えた影絵はまるで人ではない醜悪な肉の塊のように蠢いている。

羊 「人が、人に、見えない。私は、誰を、幸せにできたんだろう。」

闇に吸い込まれていく羊。

暗転

⑫ トウミ

トウミ 「羊ちゃん！」

明かりが入る。

羊 「トウ・・ミ？」

周りで見えていた。幻影はいない。トウミが立っている。

トウミ 「びっくりした。ぼーっとしてるんだもん。もう少しで車に引かれるところだったよ。」

羊 「ああ、うん、ありがとう。」

トウミ 「それにしても、こんな所で会うとは思わなかった。」

羊 「トウミ？」

トウミ 「そうだよ。え、もしかして私の事忘れた？」

羊 「いや、そんな事ないです。久々だったので。」

トウミ 「ずっと会ってなかったもんね。」

羊 「そう、ですね。」

トウミ 「・・・。」

羊 「？」

トウミ 「敬語。」
羊 「はい？」
トウミ 「なんで敬語なの？」
羊 「ごめんなさい。あ、ゴメン。」
トウミ 「いいけど。あのさ私何度も連絡してたんだけど知ってた？」
羊 「・・・うん。」
トウミ 「メールしても、電話しても返事してくんなかったもんね。あの時は凄く傷ついたらんだよ？」
羊 「それは。」
トウミ 「いいよ。怒ってないから、羊ちゃんりの優しさだったんでしょ？未練とか残らないように。」
羊 「・・・。」
トウミ 「みゆきって覚えてる？」
羊 「ああ、うん、仕事先の。」
トウミ 「そうそう、その娘にね。この事言ったら、凄く大人だねって言ってたよ。普通ズルズル続いちやう人が多いって。」
羊 「そうなのかな。」
トウミ 「だって。良かったね。」
羊 「別に良くはないでしょ。」
トウミ 「私は何度も羊ちゃんの家、行きそうになったなあ。近く通り過ぎたり、落ち込んだ時とか。」
羊 「そっか。」
トウミ 「ま、行かなかったけどね。ご両親に会うの気まずいし。後は。彼女とか。」
羊 「・・・。」
トウミ 「あゝ、その感じだといえるな？どうなの？いい感じ？」
羊 「どうかな、中々、難しい。」
トウミ 「なんで誤魔化すのよ。大事にしないと駄目だよ。」
羊 「わかってる。」
トウミ 「うん。あ、そうそう羊ちゃん連絡してたのは伝えたい事があって。」
羊 「何？」
トウミ 「うん、なんだと思う。」
羊 「いやいや・・・言いたい事が有るのはお前でしょ？」
トウミ 「そうだよ。」
羊 「・・・。」
トウミ 「・・・。」
羊 「あゝ。」

トウミ 「何？」
羊 「結婚する事になった、とか？」
トウミ 「ふーん。」
羊 「あ、いや、そんな事ないか。ゴメンな。」
トウミ 「・・・。」
羊 「あゝ何かな。家族関係かな。」
トウミ 「当たり前。」
羊 「ん？」
トウミ 「私、結婚する。」
羊 「・・・そっか。」
トウミ 「うん。」

間

羊 「あゝ、そっかあ。」
トウミ 「うん。」
羊 「あのさ。」
トウミ 「何？」
羊 「正直に、話していい？」
トウミ 「・・・いいよ。」
羊 「何か、すつつごく嬉しい。それでいて相手が凄く羨ましい。何だろ？この感情。悔しさとか。嫉妬とか喜びとか色々混じってる気がする。ちょっと、どういう風に言葉に出していいかわかんないや。でも、本当に嬉しい。相手は年上？」
トウミ 「うん。」
羊 「そっか、トウミなら絶対いい相手見つかるって思ってた。直ぐにトウミを今度こそ大事にしてくれる相手が見つかるって。」
トウミ 「私だって色々、頑張ったんだからね。」
羊 「ああ！おめでとう！」
トウミ 「ちよつと！声が大きい。」
羊 「あゝ。」
トウミ 「・・・羊ちゃんなら、喜んでくれるって思ってた。」
羊 「そう？でも色々混じっちゃってるよ。」
トウミ 「そうだねえ。それでも・・・？」
羊 「俺な、ずつと、ずつとトウミを苦しめてるって思ってた。あんな目に合わせて、一方的にこっちから別れを告げて。でも、それは、自分の勝手な都合だけトウミが幸せになる為には、考えたくないけど誰よりも自分が一番だって思いたいけど他に良い男が家

族にも反対されないトウミを誰よりも優しく大切にしてくれるような人が出来るって。その為の選択だったって。そう思っても、そう思い込んでても、後悔ばかりしてた。」

トウミ 「うん。」

羊 「あゝ、あゝ。」

トウミ 「ハハハ、変だよ羊ちゃん。今の人はね羊ちゃんみたいに笑わせてはくれないし、困ったときにグイグイ引っ張ったりはしない人。ちよつと、ぼやくんってしてる。だから、少し、なんて言うのかな、ポツカリって時もあるよ。」

羊 「何だよそれ。俺にはない良い所もあるんだろ。」

トウミ 「……。」

羊 「そりや、そうだよな。」

トウミ 「うん。……あのね。さつき羊ちゃんは私を苦しめてるって言ってたけど。私は羊ちゃんに出会えて一緒に慣れて良かったって思ってるよ。私が落ち込んでる時とか、病気で入院してる時とか、いつも一緒にいてくれた。誰よりも私の事を考えてくれて。悩んでくれて。今の私はそういう羊ちゃんがいたから存在してる。だから、後悔はしてない。羊ちゃん。」

羊 「ん？」

トウミ 「だから、もう自分を責めなくていいんだよ。」

間

トウミ 「ちゃんと会って直接言いたかったから。言えてよかった。」

羊 「うん、本当におめでとう。」

トウミ 「ありがとう。」

羊 「うん。」

トウミ 「じゃあ。」

羊 「おう。」

トウミはける

羊 「……。」

暗転

⑬父と息子

明かり入る。

自宅にて、健治が座っている。羊、入ってくる。

健治 「……。」
羊 「……親父。」
健治 「なんか、飲むか？」
羊 「いい。」
健治 「……。」
羊 「……皆は？」
健治 「おらん。」
羊 「……そっか。」
健治 「羊を追っかけるいうてな、出て行った。」
羊 「うん。」
健治 「皆、顔真つ青やったわ。」
羊 「あのな。」
健治 「……。」
羊 「あのな親父。」
健治 「ん？」
羊 「どうしても、どうしてもな、言わなきゃならない事がある。」
健治 「……。」
羊 「ずっと。親父に黙ってた事。言えなかった、事。」
健治 「ん。」
羊 「母さんはな、母さんは……。」

羊は声をだそうとしている、しかし、言葉が出ない。

羊 「なんでや、なんで……こんな時に。」
健治 「……。」
羊 「なんで、俺は……今迄ずっと黙ってた事があんねんって。それは、それを。今ちゃんと親父に伝えないと。そうしないと。俺はもう……向かい合うって。なのに、なんで。」
健治 「羊……もう。ええよ。」
羊 「？」
健治 「理解とった。」
羊 「親父。」
健治 「お前に、辛い思いさせたな。」
羊 「もう、もう俺はどうしていいかわからなくて、それでもせめて親父が少しでも楽になるように考えて。」

健治 「それがお前なりの答えやったんやろ？」
羊 「うん。」
健治 「ありがとうな。」
羊 「うん。」
健治 「母さんの余命の事、言ってくれて。」
羊 「……。」
健治 「理解ってた。母さんが助からないって事は。あんな痩せてもうて、点滴でしか食事もできへん状態なんやから。それはな、いくらなんでもな、判るんやで羊。どれたけ手を尽くしたんや思てる？どれだけ色々なお医者さんに見せた思てる？でもなアカンって言われても、生きて欲しいって心から願ってる自分がおんねん。自分の命が半分でもそれ以上でも分けて母さんが元気になってくれるんならな、俺は渡したいんやで羊。」
羊 「うん。」
健治 「さつき、お前を追いかけて行く前に、知子らにも言うた。皆、俺の顔見て泣いとった。俺の顔見て、悔しい！何でこんな事になったん？どうして？って言うとった。こんな時やからな、泣いてええんや。だから、お前も無理せんでもうええんやで。」
羊 「……。」
健治 「かよは、あのおっさんと付きおうとるんかな？」
羊 「わからん、そうなのかな。」
健治 「母さん言ってたやろ？孫が見たいって。」
羊 「……。」
健治 「焦っとるんかな。そんな重荷背負わしたくは無いんやけどな。あ、あとお前に相談があつてな。聞いてくれるか？」
羊 「何。」
健治 「今度、知子も連れて家族全員で母さんのお見舞いに行こうと思ってるんや。母さん口には出して無かったけど知子に合いたいと思うとると思う。知子が望むなら旦那も連れて。知っとるんやで、母さんが内緒で知子と旦那に連絡とった事。なあ、どうや？」
羊 「いいと思うよ、親父。」
健治 「そうか！安心したわ。喜ぶと思うわ、……母さんも。フッフ。……羊。」
羊 「うん？」
健治 「なんか不思議なんや。俺、毎日見舞いに行つとるやろ。」
羊 「うん。」
健治 「毎日毎日、見舞いに行ってるはずやねんけどな。何でかな？何でか、もうずっと母さんにおうてない気がすんねん。ハハハ。」
羊 「……。」
健治 「いやあ、参ったよ。年かな。年は取りたくないんもんな。」
羊 「親父。」

健治 「ん？」
羊 「母さんは、もういない。」
健治 「……。」
羊 「母さんは去年の9月に死んだんだ。」

間

健治 「……そうか。」
羊 「うん。」
健治 「今度お見舞いに行くんや。」
羊 「うん。行こう皆で。」
健治 「母さん、喜ぶやろうな。」
羊 「喜ぶよ母さんは絶対。」
健治 「服の着替えも持ってかなあかんし。」
羊 「俺も準備するよ。」
健治 「あ、なんか食べるものも。」
羊 「かよと姉ちゃんに母さんが好きだった小さめの蜜柑買って来させよな。」
健治 「背中が痛いって最近言ってたな。」
羊 「言ってた、背中さすったらなあかんな。」
健治 「中々寝付けへん、言うてた。」
羊 「痛み止めの量、増やしてもらおな。」
健治 「元気になったら温泉行こうって。」
羊 「温泉大好きやもんな。母さん。」
健治 「外出許可もろて。」
羊 「近々出るよ。」
健治 「そりやな、そりや。……母さんは。」

健治はそれ以上言葉が出ない。それを見つめる羊。

終わり

- ※イソップ絵本 オオカミがきた 岩崎書店
- ※新編 イソップ萬話 川名澄 アーサー・ラツカム 風媒社
- ※スクリップスドクターの脚本教室 三宅隆太 新書館
- ※31歳BL漫画家が婚活するところなる 御手洗直子 新書館
- ※「6〜ロク〜」 劇団ポポポが第一回公演
- ※「恋其ノニ」 岸田理生
- ※「RENGA」パート3 UNFIGURE
- ※<https://www.youtube.com/watch?v=GND0DNXkPf8&feature=related>
- ※「NNドキュメント」6丸山夏鈴〜最期までアイトル〜
<https://www.youtube.com/watch?v=Q7PU0Pik90>
- ※「トリプテイク」 フランシス・ブーロン
- ※肺癌闘病記
- <http://www.w3.tokai.or.jp/midorit/frame.htm>